
視線

木の実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

視線

【Nコード】

N6139P

【作者名】

木の実

【あらすじ】

『こんな沢山の視線があるのに一つも交わらないなんて。そんなの虚しいじゃないか。』
人の視線を追い続ける少年が探す、人と人との視線の繋がり。どれだけ見つけることができるだろうか。

プロローグ

人は、意識して見ないと物を認識出来ないらしい。

例えば、考え事をしているとき。目は確かに開いているけど、外の景色なんて見えてはいない。見る必要がないからだ。『見る』ということは『興味がある』ということ。逆にいえば、『見ない』ということとは『興味がない』ということ。当たり前に見えることかもしれないが、実際その事実を意識し理解している奴はいったいどのくらい居るのだろう。見ている振りをして、理解した気になっていないか。

もっとちゃんと焦点合わせて、がつつり見てみるよ！

「――…がわん？」

「戻ってこい緒川！」

「――ッ!？」

教科書で頭を叩かれた。

うん、痛い。

恨めしげに見上げると、眼鏡をかけた神経質そうな数学教師が横に立っていた。

「緒川、問2の答えは？」

「え、あ…えーと、すみません分かりません」

先生はわざとらしく大きな溜め息をついて歩きだす。寝ている生徒を2、3人叩き起こして教壇に立った。

やべ、説教モードだ。

「一回一回の授業が大切だと、何度言ったら分かるんだ？こういう風に授業を中断したら、せっかく真面目に授業を聞いている生徒の邪魔になるというのがまだ分からないのか！」

あーこれは長くなるな。

クラスみんなの意識が先生から離れていくのが見える。
視線がバラバラに動きだす。

先生、気づきませんか？

自分の言いたいこと、好き放題言ってますけど、あなたの言葉に興味持っている人なんていませんよ。僕の右隣の長谷川さんは外の景色を見てるし、左隣の大橋くんはずっと黒板のXと言う文字しか見ていません。それと、誰なのか判別はつきませんが、4人ほどの生徒が先生の少し長い鼻毛を直視しています。蛇足ですが、あなたの目に向けられている視線が一つもないんですよ。だけど、当然といえば当然なのかもしれません。先生の視線の先も決して生徒の目ではないんですから。

ホント、すれ違いもいいとこだ。

こんなの虚しいじゃんか。

こんなに沢山の視線があるのに、一つも交わらないなんて。

みんな、見えないのか。

一人ひとりの目から出る一筋の光が。

僕には視線が見える。

僕と視線

僕が視線の奴と出会ったのは、結構最近の出来事。中一の終わりだった。というか、何故『視線』が擬人法で表現されているのか甚だ疑問だが、そんなことはどうだっていい。

僕はその時恋をしていた。

同じクラスの渡辺さん。

なんていうか、全てが可愛かった。特に、彼女がくしゃみをするとき必ず「はっくちゅん」ってなるのが、ヤバいツボだった。

それはともかく、僕はいつの間にか、彼女を見る習慣がついた。いや、これでは語弊があるな。

僕は小心者だから、彼女を直視することなんてできなかった。代わりに。

僕は彼女の視線を追う習慣ができた。

多分それがきっかけだ。

視線を追いつけていくうちに、最初はぼんやりと、徐々に鮮明に、細い糸のような、あるいはレーザーのような光の線が見えるようになったのだ。

今現在の僕なら、意識さえすれば多数の視線を同時に見ることができるのだが、当時の僕は恋する純情少年だったため、彼女の視線しか見えなかった。

視線が見える―――。

その事に戸惑いはしたが、それよりもただ素直に嬉しかった。彼女と同じ視点でいられる安堵感と、誰よりも彼女のことを分かっ

ているという優越感。

僕は完全に恋に酔っていた。

『視線』が時に残酷な事実を見せることに気付きもせずに。

ある日の放課後。

渡辺さんは教室の窓から外を見ていた。僕も自然と彼女の視線に注目する。

その時の視線がいつもとは違うことに僕は気づく。その視線の光は力強く、なんとも活き活きとしていたのだ。

いったい何を見ているのだろう。

半ばドキドキしながら、視線を追う。その先は。

高橋くんかよおおおお！！！！

彼はサッカー部の期待のルーキーだ。違うクラスだけど、帰宅部の僕でさえ顔と名前は知っているってくらい有名な人物なのである。知りたくなかった…。

ああ、知りたくなかったよ！！

なんかもう、恥ずかしい。

その日、僕は涙目で多分自己最高記録の走りで家に帰った。

あの衝撃の日から二週間が経過した頃。

彼女の視線を見る癖はまだ治っていない僕だった。

彼女は窓からグラウンドを見ている。未だグラウンドを見るときは視線が眩しいくらい爛々と輝いていた。

悲しいことに、僕は無意識にその視線を追ってしまう。

その時、生意気なルーキー高橋くんの目から視線が伸びてきた。それは渡辺さんの視線とぶつかり、線香花火のような火花を散らす。

二つの視線は絡み合い、混ざり合い、一つに繋がった。

僕は息を呑んだ。

その、目を奪われるような、なんとも美しい光景に僕は頭が真っ白になったけれど。

これだけはつつこんでおかねばなるまい。

お前ら、デキてたのかああ！！

僕は失恋した。

何もすることなく。

本当に何をするでもなく。

渡辺さんの視線をストーカーのように追いつけた挙げ句、この様だ。いつそのこと僕を『視線不正閲覧罪』的な罪で逮捕してくれよって感じだった。

実は半年間くらい密かに片思いしていたから、なかなか諦められなと思っていたのだけれど、案外スッパリと諦めることができてしまった。

彼女のあの熱い視線を僕の方に向けさせる自信も気力もなかったし、そして何よりも。

結局、一度も彼女の視線が僕に向けられたことがなかったからであろう。

彼女は完璧なまでに僕に無関心だった。

ただ、それだけだ。

初恋は見事に砕け散ったわけだけれど、人の視線を見る癖は中二になっても変わらない。

『視線不正閲覧罪』で捕まらない限り、僕はこれから様々な視線を

見続けるつもりだ。

突き刺さる視線？

視線が見える、というのは。

幽霊が見えるとか超能力が使えるとかいうのよりも胡散臭い。

しかしながら僕には見えてしまうのだ。数多の線が。

例えば、僕の右隣に座っている彼女――。

こここのところ、今まで感じなかった異変を彼女、長谷川さんに感じる。

まるで、機関銃で狙いを定めているかのように。

光の筋が彼女を貫いている。

それも、相当な数だ。

もし本当に彼女が機関銃で狙われていたら確実に蜂の巣になってしまっただろうってくらい、彼女に視線が集まっていた。

何でだろう。

最近まではそんなこと起こっていなかったはずだ。

一週間ほどの間にいったい何が？

僕は彼女の視線を追う。こんなにも沢山の視線に囲まれているのに、彼女は「我関せず」といったふうに、ずっと外の景色を見ていた。

うーん…。

分からない。

再び、彼女を取り巻く視線に注目する。

全体的に上半身に集中しているような気がするな。心臓を打ち抜こうとしているみたいだ。

視線が突き刺さっている。
そんな感じ。

彼女に恨みでもあるのだろうか。

今度は彼女の心臓辺りの光の筋の一つを辿って、その視線の持ち主を伺う。

斎藤くんか。

険しい顔をしているかと思いきや、軽く顔が緩んでいる。

ん？

待てよ。

僕はいやな予感がして、彼女を突き刺している視線の主をすべて確認した。

男、男、男、男。

みんな男。

こいつら。目当ては長谷川さんの胸か！

そうか。

もう6月下旬ともなると、夏服になってくる。

確か、長谷川さんも一週間ほど前から夏服になっていた。

僕が言うのもアレだけど、彼女の胸は中二にしてはなかなか発達している。夏服になったらそれが強調され、思春期真っ盛りの男子たちの好奇の目に晒されていた、というわけか。

「緒川くん」
ん？

「あんまり人の胸をガン見しないでもらえるかな」
「――っ！！！」

話かけてきたのは、何を隠そう長谷川さんだった。

ていうか、あんまり話をしたことのない彼女が、久々に声をかけてくれた台詞がこれだなんて、まだまだガキの僕には耐えられない。このままだと、とてもじゃないが彼女の顔なんて見れない！何か！何か言い訳を！

で？

何を言うんだ？

視線を見ていたとでも？

観念した僕は、顔を上げて彼女を見る。

長谷川さんの蔑んだ顔を想像していたのだが、予想に反して彼女は不思議そうな顔をしていた。

「そんな悲壮感溢れる顔しないでくれない？」

そんなに悲惨な顔してたのか。

確かに哀れだとは思ったが。

「そんな顔されたら、どう反応すればいいかわからないじゃん」あれ？

胸を見たことを怒っているんじゃないのか？

ていうか、僕は断じて胸を見ていた訳ではないが！その主張だけは譲れないが！それはとりあえず置いといて。

「ごめん」

よく分かんなくなつて、とりあえず謝ってしまう僕。

なんていうか。

本当に弱えな！。

「変わってるねー、緒川くんは。中二なんだから、『お前の胸なんて、み、見てねーよ！』みたいな反応すればいいのに」

けたけた笑って、長谷川さんは僕に言う。

もっとクール人だと思っていたけれど。

実際は違うみたいだ。

「長谷川さんも大人び過ぎてるよ。中二だったら『バカ男子！胸とか見て、サイテー！』とか言えはいいのに」

そう言ったら、また長谷川さんは笑った。

あどけない笑顔。

サッパリとした性格。

だから、分からない。

「いつも外ばかりを見て、視線に気付かない振りをしているのはなんで？」

さっき僕にしたみたいに。

見るな、と。

キツく言えば、状況はもう少しでしたはすだろうに。

そう思ってたの発言だったけれど、あまりに軽率だったことに気付く。すぐ謝ろうとした瞬間。

「慣れてるから」

そう、彼女は言った。

その顔からは少女のようなあどけなさは消え、代わりにいつもの大人びた笑顔になっていた。

「少し、話さない？」

そう言って彼女は席を立つ。

僕も無言で、それに続いた。

突き刺さる視線？

たどり着いたところは、あまり目の届かない場所にある花壇の前。

「私、実は園芸部なの」

そう言って、長谷川さんはしゃがみ込んで花を覗き込む。

「ここなら人も来ないし、私達を見てカップルだと思われることもないでしょう？」

確かに、こんな場所ですかがみ込んでいたら、例え男女二人きりでいても、花の手入れをしている園芸部員のように見えるかもしれない。

中学生は恋愛沙汰に敏感なのだ。

黒板に相合い傘を書かれ、さして仲が良いわけでもない奴らにヒューヒュー言われるのは、僕も避けたかった。

「うん。いい場所だ」

頷いて、僕もしゃがみ込む。

「……………」

何を話せばいいのか分からん。

二人ともいきなり黙り込んでしまった。

ヤバイ。これはヤバイ。気まずすぎる。話しかけようにも、話が話だけにどう切り出せばいいんだ？ 巨乳も大変ですなあ、なんていったらセクハラもいいとこだ。どうする？ どうすれば！？

僕がぐるぐるしている間に、彼女は気持ちの整理が出来たらしく、ようやく口を開いた。

「巨乳も大変なの」

「単刀直入過ぎないか！？」

その切り出しは有りなんですか！？

彼女はまた、けたけた笑った。

「小六くらいの頃から明らかに胸が大きくなってね、まあそれからみんなの注目の的であるわけなのだよ」
花をいじくりながら彼女は続ける。

「同級生ならまだしも大の大人まで。ものすごく不快だった」

好奇の目に晒される。

吐き気がするほど不愉快な視線。

経験したことのない僕でさえ、ぞっとする。

「一番気持ち悪かったのはさ」

そう言って、彼女は僕に近寄る。

あまりにも近いから、不覚にもドキドキしてしまう。静まれー！彼女に悟られるな！

「目を閉じて、四十代くらいののがたいのいい髭生やしたおじさん想像してみてよ」

僕は目を閉じる。

まだ心臓は落ち着かないけれど、頑張って想像してみる。

体育の矢野先生、みたいな感じか？ルックスもそっくりだし、性格ねちねちしてるし。

性格は全くもって関係ないはずだが。

「想像した？」

「うん」

「そいつが君の隣にいます」

矢野が隣。矢野が隣。

自己暗示する。

すると、いきなり肩に手を置かれた。それがゆっくりと首の後ろらへんに移動する。

全神経が触られている場所に集中する。

長谷川さんにやられているので、普通だったら万々歳だが、今僕の

隣にいるのはあくまで矢野先生。

全身鳥肌が立つ。

そして突然、首の後ろにあった手が、背中の中心をすうっとなぞる。体中に電撃が駆け抜けた。

力が抜けたその瞬間。

息がかかるほどの耳元で。

まるで囁くように。

「イイ体してるね」

「ぎいやああああ!!」

僕は後ろに飛び退いた。

反射的に囁かれた方の耳を押さえる。

長谷川さんに言われたはずなのに、僕の隣にいるのはあくまで矢野先生。

矢野の声がダブって聞こえたよオイ!

長谷川さんは大爆笑だ。

僕も力無く笑う。

「これは、なんていうか。…キツいね」

「そうでしょう」

まだ長谷川さんはひーひー言っている。

「もうホント気持ち悪いのよ。だから私、視線を感じたらそいつを睨んだり、緒川くんに言ったように『やめてくれ』って言ってたんだよ。…初めはね」

「そうなんだ」

やっぱり彼女は抵抗していたのか。

「でも、通用したのは中一の最初まで」

「通用しなくなったの? 中一男子の精神がそこまで強いとは思えないけど」

僕も一発で心が折れたし。

ていうか、僕は断じて胸なんて見ていないけど。

「まあ、私の攻撃的な一言がクラスを敵に回してしまったってことだよ」

彼女は微笑む。

この話題には不釣り合いだ。

「自意識過剰、だってさ。あいつは見られてもいないのに、構われなくて同情されたくて嘘をつくんだ、って」

「……………」

「でも実際そうだったかもしれないよね。視線に過敏になって、たくさん人を傷つけただけなのかも。いや、多分そうなんだ。きつとただの思い込みで。きつとただの気のせいだった」

自分に言い聞かせるように、頷く彼女。

「反論の余地はないよ。いや、意味がないよね」
諦めたような。

抵抗するのに疲れたような。

力が抜けてしまったかのような。

ため息のような。

そんな声で。

「視線って目に見えないじゃん」

彼女は、言った。

言葉が出ない。

励ましの言葉も何も出てこない。

僕には見えるよ。

そう言ったところでどうなる？

きつと、どうにもならないし、どうにもできない。

絶望的なまでに悲しい現実。

彼女は我慢して、気付かない振りをするほかないのか。

数秒の沈黙。

それを破ったのは全く知らない声だった。

「長谷川さん！」

「九頭《くとう》先輩？」

どうやら園芸部の先輩のようだ。

「花の手入れいつもサンキューな。ん？こいつは？」

「同じクラスの緒川くんです。ちよつと手伝ってもらって」

ふーん、と九頭先輩とやらが興味なさそうに一瞥する。

僕は適当に頭を下げた。

「そっかそっか。で、花の様子はどう？」

中腰になって九頭先輩は花壇を覗き込む。

「あ、大体大丈夫です。でもこれだけが虫に食べられちゃって――」

そう言って、花の状態を説明する長谷川さん。

僕は完全に置いてけぼりになってしまったので、何となく九頭先輩の視線を追う。

その先は。

長谷川さんの胸元だった。

露骨に、胸元だった。

上から見たら、服の隙間から少し胸元が見えるのだ。

花壇を見ろよ先輩。

心の中でため息をついて、長谷川さんは大丈夫かと伺う。

彼女は平然と花について語っていた。視線は花の方へちゃんと向いている。

ちゃんと向いていた。

向いていたけれど。

ゆらゆらと挙動不審に動く視線。

何かを気にしているかのように。

当たり前じゃないか。

ここ数年、彼女はずっと視線に晒され続けてきたんだ。

こんな露骨な視線に。

気が付かないわけ、ないじゃないか。

僕は勢いよく立ち上がって、九頭先輩の顔に右手を押し当てた。

両目を隠せるように。

視線を遮断出来るように。

「……………！？何するんだよお前！」

当然だがすぐさま引き剥がされる。

「…やめてくださいよ」

「何の話だよ！」

「その不快な視線を長谷川さんに向けるなっつってんだよ！」

僕は叫んだ。

九頭先輩は素っ頓狂な顔をしている。もちろん長谷川さんも。

長谷川さんは僕にこんなことを望んでいない。

そんなこと分かっている。

分かりきっている。

だけど。

視線が見えてて、彼女の置かれている状況を把握しているのに、何もしないのは。

多分、間違ってる。

「視線は確かに見えないけど！だけど、ちゃんと存在してる！向けるべき場所とそうじゃない場所、考えろよ！じゃないと」
彼女のように。

「心に穴が開く人間だって居るんだ！」
視線が刺さる。

細い針のような視線が。
身体を貫通して。

心に小さな穴を開ける。

「穴から大切な何かが抜けるんだよ！」
心がしぼんでいく。

せめて、気付かないように。

大切な何かが抜け出ていることに、どうか気付かないように。

ずっと目をそらしていた彼女。

「しっかり見ろよ！なんでみんな見えないんだよ！自分が誰かを突き刺していることになんて気が付かないんだよ！」

視線はもっと、優しいものであるべきなのに。

きっと、優しいものであるはずなのに。

「……………いい加減気づけよ」

そう言って、僕はしゃがみ込んだ。

そして、正気に戻った。

ヤバイ。ヤバイよこれ。先輩の視線から禍々しい殺気が。…死亡フラグ。なんで熱くなっちゃったかな僕。馬鹿過ぎる。…もういや。どうにでもなれ。

目を閉じて、嵐が過ぎるのを待とうとする。九頭先輩は、大きな舌打ちをし、意味わかんねーよ、と捨て台詞だけを残して去っていった。……

なかなか優しいお方だ。

いやー懐が大きい！

生意氣言っちゃって、すんませんでしたー！

「意味わかんねーよ」

長谷川さんが僕の目の前に立って言った。

「僕も、自分で何言ってるのか分からなかったよ。文法も意味不明でさ。日本語はなんて難しいんだろう。今後、国語は真面目に勉強するよ」

「その必要がありそうだね。…うん。ホント何言ってるのか分からなかったけどさ」

長谷川さんも、しゃがんだ。

目と目を合わせて。

視線と視線を合わせて。

なんとも優しい声で。

「でも、助けてくれた」

そう言って再び立ち上がり、手を差し出す。僕は少しだけ戸惑ったけれど、彼女の手を握って引っ張り起こしてもらった。しかし、その反動で、僕と彼女の体が近づく。

その瞬間。

息がかかるほどの耳元で。

まるで囁くように。

「お礼に今度、何カップか教えてあげる」

「きよ、興味ないですから！！」

僕はなんてガキなんだ。

長谷川さんはけたけた笑う。

あどけない笑顔。

その顔を見たら、今日の恥ずかしすぎる醜態なんて、どうでもよくなってしまうた。

突き刺さる視線？（後書き）

一応、『突き刺さる視線』一段落つきました。
ふう。

気が向いたら、感想書いてくださると嬉しいです。

関心なき視線？

意味のない場所に視線を飛ばす人間がたまにいる。

例えば、教室の天井の端っこ。

ぼんやりと。

何を考えるわけでもなく。

見つめ続ける。

関心なき視線。

とても表現しようか。

そういう人たちは大概、どこ見ているのか分からない人だ、と認識されている。

「おーい緒川！」

「何？坂本くん」

「ちょっと来いよ」

坂本くんはそう言って、自分の席に座っていた僕を引きずり出して、教室の前の方に連れてきた。

周りにはあと3人、僕とよく話す友達がいる。

あまり特定のグループを作らずフラフラしている僕の面倒を見てくれる、良い奴らだ。

「ゲームしようぜ」

「ゲーム？」

「そ。勝ったら購買のパン好きなの奢ってやる」

「いいね。内容は？」

「あいつ見てみるよ」

そう言って、坂本くんは指をさす。

だけど指の方向ではあやふやなので、僕は彼の視線を追って『例のあいつ』を探す。

「大橋くん？」

「そ。大橋が今何を見ているか当てるゲーム。当てた奴に当てられなかった奴がパン奢る。俺たち5人いるから、もし1人だけ外した場合、そいつは4人分のパンを奢らなきゃならない。オーケー？」

「おっけ」

僕は頷いた。

ふははは。馬鹿共めが。これは僕のためのゲームと言っても過言ではない。本来、人の視線を賭の対象にするのは倫理的に間違ってるが、僕も所詮は人間。パンを奢られるためなら、多少堕ちることもいとわないのだ。

大橋くんは、僕の左隣の席にいる、静か系男子だ。かといって、おどとしておらず物腰も柔らかかで、絡みにくいこともない。身長は170センチ近くあって高め。端正な顔立ちで女子にも評判がある。ただ欠点は、どこを見ているか分からない、何を考えているか分からない。そういうところ。まあ、逆にそれがいいって言う人もいるみたいだけど。

席が近いせいもあり、僕もよく彼の視線を追う。その視線の先はいつも奇想天外で面白いのだ。

さて、今彼は何を見ているのだろうか。

男5人が前から彼をこっそり観察する。その視線に気付く様子もなく、大橋くんは一点を見つめ続けている。

「時計の秒針」

坂本くんが言った。

「いや、違うな。一番前の席の木原さんだ」

「アレじゃね？花瓶だって。台の上に置いてるやつ」

「いや、花瓶にささってる花だよ」

「具体的すぎねえ？花瓶⇨花でいいじゃん」

「じゃ、2人は同じ意見ってことで」

わいわい言い合っているなか、僕はようやく口を開く。

「黒板だよ。強いていうなら消し損じてる右上のあたり」

「よっし！みんな答え出たな！答え合わせしにいくぞ」

そう言って、坂本くんは意気揚々と大橋くんの方へ歩き出す。
僕たちも後に続いた。

「大橋い、今どこ見てた？」

にかーっと笑って、坂本くんが聞く。

「何の話？」

首を傾げる大橋くん。

「いやー今さ、大橋がどこ見てるか当てるゲームしてて。だからどこ見てたか教えてくれよ」

「あーそういうことか」

大橋くんは微笑む。

自分が賭のネタにされているのに嫌な顔一つしない。

「：花瓶だよ。綺麗な花だと思ってさ」

「「イエースッ！」」

当てた二人がハイタッチして喜ぶ。

「ヘイ！大橋！ヘイ！」

「当たったんだ。すごいね」

そう言って、大橋くんもハイタッチに応じる。

僕はというと。

絶望感に満ち溢れていた。

外した…だと…！？

確かに大橋くんは黒板を見ていたはずなのに。

嘘を吐いた？

でも、一体なんのために？

なんとなく嘘をついただけかもしれない。だけど、嘘をつく必要なんてなかったはずだ。

ていうか、ホント僕の勝手な意見だけど、正直に答えてほしかったなあ。

ああ、ただでパン食べたかった…

僕はため息をついて、財布の中を確認する。

その時、あまりにショックが大きくて気付かなかった。

大橋くんが怪訝な顔をして、僕を見ていたことに。

関心なき視線？

昼休みが始まり、坂本くんに取りあえず200円を託す。

「残金は返してね」

「へいへい。あれ？緒川も一緒に行かねえの？」

「僕は先に図書室行くよ。返却期日とくに過ぎちゃってさ」
本を手にとって見せる。

坂本くんは了解、と片手をあげて4人で購買の方へ歩いていった。
僕もすぐに図書室へ向かう。

適当に先生の小言を聞き流し、無事に本を返却し終わったので、僕はいったん教室に戻った。

自分の席でほっと一息。

今から購買に行っても、僕のお気に入りパンはまだ残っているだろう。

ふいに、隣から声が聞こえた。

「はい、これ」

「へ？」

差し出されたのは、僕が愛してやまない『魚肉ソーセージぱんDX』だった。『魚肉ソーセージぱんDX』とは、普通のパンに3種類の魚肉ソーセージがぶっ刺してあるというシンプルかつダイナミックなパンなのである。美味しいと思うのに、まあなんていうか、人気はない。

というか、そういうことはどうだっていい。

今、思考すべきことは。

なぜ大橋くんが僕にそのパンをくれるのか、ということだ。

疑問が表情に出たのか、大橋くんは笑顔で言った。

「いや、さっきのゲームで、俺ウソ吐いちゃったからさ。そのお詫びというか」

さっきのはやっぱり、と言いかけて口をつぐむ。

「…律儀なんだ。というか僕の好きなパンよく知っていたね」

「いつも飽きずにそのパン食べてるからさ。遠慮しないでいいよ。俺、魚肉ソーセージ苦手だし」

「…ありがと」

とりあえず僕はパンを受け取る。

良い人だなあ、大橋くん。

「他の4人にもパン奢ったの？」

「はは、まさか」

あれ？意外な答えだ。

だったら尚更、なぜ僕にだけ？

「正解したのは、緒川だろ？」

一瞬、呼吸が止まった。

彼は今なんて？

どうしてそれを知っている？

「俺がさ、花瓶を見てたって言ったとき、緒川『嘘だろ！？』って顔で俺を見てた。なんで、そんな顔するのかなって思ったよ。だってそうじゃん。俺が何見てたかなんて、本来俺にしか分からないはずだろ？俺の答えを疑問に思うことはできないはずなんだよ。けど緒川は、明らかに俺の答えに疑問を抱いてた」

「…僕が変な顔をしていたのは、自分が不正解だったのが残念だったからだよ」

「いや、違うな」

「本当だよ」

「…………。俺、あの時黒板見てたんだ」

「…ふうん」

「緒川の答えも『黒板』だったんだろ？坂本に聞いたよ。しかも『

強いて言うなら消し損じている右上の方』とか言っただんろ？ドンピシャだ、緒川。これって偶然か？」

「偶然じゃないかな」

「……………」

「……………」

大橋くんは、しばらく疑り深い目で僕を見ていたけれど、すぐいつもの柔らかい笑顔に戻った。

「そっか…。そうだよなあ。悪かったな緒川。変なこと言っちゃって」

「別に構わないよ。パンも奢ってもらえたし」

そう言って僕はパンを頬張った。

うん、美味だ。

大橋くんも母親に作ってもらったのであろう弁当に手をつける。

大概の人は机を動かし、グループでくっついて食べるのだけれど、大橋くんも僕もそんなタイプではないので、結構真ん中あたりの席なのにも関わらず、前を向いて黙々と食べる。

しかし、久しぶりに話せたし、せっかくのなので、僕は、僕は大橋くんに話しかけてみることにした。

「…さっきの話なんだけど」

「ん？」

「大橋くん、嘘吐いたって言ったよね。なんで花瓶にしたの？」

大橋くんは質問の意味を図りかねて、首を傾げる。

「あ、えーと。そもそまるで嘘を吐いたのかなーって思って。嘘を吐く必要がなかったような気がしたんだけど」

「あー。それはさ」

彼はいったん物を飲み込み、こちらを向いた。

「花を見てたって言ったら格好いいかなって」

なんだそりゃ。

「はは、そんな顔しないでくれよ」

顔に出てしまったらしい。

「でもさ、もし俺が正直に『黒板の消し損じを見てた』なんて言ったらどうなると思う？」

「うーん…」

どうにかなるのだろうか？

「やっぱり訳分らない奴、って思われるだろう？」

「あ」

大橋くんは、周りからの評価に気がついていたんだ。

あまりに何でもないような様子だから、気にもしていないのかと思っていた。

「俺が他人の評価気にするなんて、意外だった？」

はっと気づく。

僕は今なんて酷いことを考えたのだろう。

分かり合えないのは寂しくて。

嘲笑われるのは悔しくて。

遠巻きにされることは切なくて。

誤解されるのは虚しくて。

誰だって、そうなのに。

大橋くんだって決して例外じゃないのに。

勝手に想像して。

勝手に彼を創造して。

僕には彼の視線が見えてたじゃないか。

どこを見ていたか、一番分かっていたはずじゃないか。

何を思って、その場所を見ていたのかは分からないけれど。あの揺るぎない視線は、彼にとって意味のあるものだったことにどうして

気がつかなかった。

関心なき視線？

そんなもの、あるわけないのに。

「：そんな顔しないでくれよ」

大橋くんは再び言った。

僕の顔をいったん見つめて、それからいつものように前を向く。
柔らかな表情だった。

この顔はどこかで見たことがあったような。

：ああ、長谷川さんだ。

花壇の前で、彼女もこんな顔をした。

諦めたような顔。

この表情、僕は好きじゃない。

「大橋くん。今、黒板の横の剥がれかかっているプリント見てるだろう？」

「え？」

驚いたように、こちらを見る。

「なんで分かって…」

「なんとなくだよ。そんな気がするだけだ」

「……………」

「いつも大橋くんは奇想天外なところを見てる。多分みんなもそれに気づいてる。なんでそんなところ見てるのかなって、そう思ってしまうんだ。なぜなら、みんなが気にも留めない場所だから」

例えば、影。

例えば、落書き。

例えば、誰かの忘れもの。

例えば、何気ない文字。

気にする必要のないもの。

だけど、彼には違って見えるのだろうか。

「僕も、なんで大橋くんがその場所を見ているのか理解できない。全く分からないよ。だけど」

これだけは分かるんだ。

多分、僕だけには。

「大橋くんにとっては、意味のある場所なんだろう？見るに値するものなんだろう？いつだって大橋くんの視線は消して揺るぎなく、まっすぐで」

細く伸びる儚い線。

その美しさを誰かに伝えることができたらしいのに。

「僕はつい、その視線に見とれてしまっただ」

そう言い切って、めっちゃくちゃ恥ずかしくなって俯いた。

最近、暴走しすぎていないか僕。

「ご、ごめん！いきなり変なことを言っただ。最近なんかおかしくて。つい先日長谷川さんに意味わかんねーよって言われたばかりなのに。アレだ。情緒不安定ってやつだ。僕まだ成長途中だからホルモンバランスがおかしくなってるんだ。だから」

「はははははっ」

「…へ？」

大橋くんはお腹を抱えて笑っていた。そんな姿、少なくとも僕は初

めて見た。

「おが、緒川って、面白、い奴だったん、だなあ、ははは」

「文節の区切り方がおかしいことになってるよ、大橋くん」

「だ、だってさ、励ましてくれるなんて思わなくて」

「うー。そんなつもりじゃなかったんだけどね」

「ああ、言葉を間違えたな」

「？」

「誰かの言葉に勝手に励まされるとは、思わなかったんだ」

照れくさそうに微笑む大橋くん。

「なんでかな。どうでもいいところを見ると落ち着くんだよ。変なのは分かってるし、理解されがたいのも分かってる。だからこそ、緒川の台詞嬉しかったよ。それでもいい、って言われてるみたいでさ」

「そっか。なら、よかった」

「…えーと、あの。緒川」

「ん？」

彼の視線はキョロキョロと明らかにおかしい動きをしている。

「どうしたの、大橋くん」

「んーとさ。こういうこと慣れてないから、やり方よく分からないんだけど」

「……？」

「もし良ければ、これから昼飯一緒に食べない？俺、なんだか緒川という話してみたくってきた」

今まで席は隣だったけど、お互い干渉したことはなかった。

隣にいるのに、まるでいないかのように過ごしてきた僕らだけど。

そろそろ、一歩踏み出してみようか。

「もちろん、いいよ」

なんだか心強くて。

結構嬉しくて。

少しだけ照れくさくて。

こういうのを『仲間』って呼ぶのかもしれないなあ、となんとなく思ったり。

なんて、青春っぽいことを考えてしまったのが恥ずかしくて。

僕はまだ、食べ終えてないパンを、大きく口を開けて無理やり一口で平らげた。

関心なき視線？（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございますm（　　）m

本当は長谷川さんも大橋くんも主に出す気はなかったんですが、なんかせっかくプロログで名前出しちゃったから話作ってみました。でも、だったら名前よく考えとけば良かったなあって思います。主人公の名前『緒川』だけど、長谷川の「川」と大橋の「お」、被っちゃってますからね。

誘われる視線？

視線が誘われるときがある。

それは『見せつける』という行為によって。

見せつけられる。

見たくなくても視界に入る。

それは決して愉快なものではなくて。

ときにそれは、怒りに変わる。

「机くつつけなよ」

その言葉の意味が分からず、そう声を発した人物を僕はまじまじと見つめる。

長谷川さんだ。

「二人、最近一緒に食べてるよね。なんで机くつつけないの？」

「え、あ。ああ…」

「なんで、っていうか…」

曖昧な返事をする僕と大橋くん。

最近よく話すようになった。

だけど僕らは今までお互い一人で食べていたため（席はあくまで隣だったけど）、昼食時に机をつけるという発想が存在しなかった。授業中と同じような席の間隔をあけて、前を見ながら食べていた。

「つけなよ、机」

もう一度そう言って、長谷川さんは僕の机を掴む。

「え！？ちよっ、ちよ、ちよっと待って！何！？」

彼女はいきなり僕の机をギーギー音をたたせながら動かし始め、横に向かせたあと、大橋くんに指示する。

「ここ、くつつけて」

「…承知」

大橋くんは、彼女に逆らうのは無駄だと考えたのか、素直に自分の机を僕の机にくっつける。

向かい合わせの状態で座る僕ら。

「…お、うおお…」

なんていうか、ものすごく照れくさい。

完全に固まっている僕らなんか気にも留めずに、長谷川さんは自分の椅子を持って来て、くっついている机の横に座る。弁当を僕と大橋くんの机の境目に置いて一言。

「じゃ、一緒に食べよ」

「…え？」

「あれ？駄目かな」

いやいや駄目じゃないけど、と大橋くん。

「なんでいきなり？」

「なんでって…。二人とも気付いてないの？」

顔を見合わせる僕と大橋くん。

うーん…。

なんのことだろうか。

「うわー。どんだけなのキミ達。まあ、そんなことだろうとは思っていたけれど」

「いったい何なんでしょうか」

何故か敬語の僕。

「私、今まで和田ちゃんと食べてたじゃない？でも、それができなくなっただけ」

「喧嘩ですか」

「じゃなくて！アレ！」

顎で指す彼女。

見た目がクールな感じなので、なんだか様になっている。

まあ、それはさておき。

例のアレは、すぐに分かった。

教室の窓側の後ろの席で、いちちゃっている男女。

同じ椅子に何故か座って、いちいち彼氏に「あーん」ってしている和田さんと、嬉しそうに食べる柳沢くん。

付き合っているのか。

「だからね、私居場所なくなっちゃって。一緒にいちゃだめかな」そんな小首傾げて上目遣いされたら、駄目だなんて言うわけがないじゃないか！

「構わないよ」

「良かった」

食べ始める3人。

長谷川さんが加わったことによって、会話が難しくなるのではないかと少し思っていたけれど、それは杞憂だったみたいだ。むしろ、話が弾んだ。

「にしても、二人熱いね」

と、大橋くん。

「そうね。まあ、両想いなんだから、嬉しいのは当然でしょ」

あのカップルをちらりと見て、微笑む長谷川さん。

「あれ？長谷川、嫌じゃないんだ」

「何が？」

「和田が取られてさ」

「うーん、まあ、その感情はないとは言わないけど。やっぱり嬉しいかな。和田ちゃん、好き好き言ってたし。報われて良かったなあって感じ」

「：そっか。そんなもんかな」

「でも、意外なのは、みんな結構普通な事だね。もっと騒ぐのかと思ってたのに」

「ああ、確かに」

「いや、そんなことないよ。みんな十分ソワソワしてる」

思わず、口を挟んでしまった。

え？とこちらを振り向く二人。

「あー、いや。なんとなく、なんだけど」

しどろもどろに後付けする。

二人は決して、なんで？とは言わず頷いてくれる。

「緒川が言うなら、そうなのかなー」

「うん」

なんだか、とても気恥ずかしくなってしまう。

「いや！ホントになんとなくだからね！」

「「はいはい」」

うわーなんだコレ！

なんだこの感じ！

「でさ、緒川くんは、誰が一番あのカップル見てると思う？」

「え？うーんと」

視線を見る。

先ほど、二人はみんな普通に過ごしている、と言っていたが、そんなことはない。

チラチラと視線が途切れ途切れにカップルを見る。

もし二人が照れながら接していたら、きっと誰かがからかっていただろう。だけど、あまりに二人が堂々といちゃついているものだから、からかいがないのだ。ラブラブですけど何か？っていう感じ。

それは見ているだけでも恥ずかしい光景で。

だけど、ガキな僕らにとっては刺激的で。

でも、気になってるなんて思われたくなくて。

ガン見している人などいない。

…アレ？

一つだけ、途切れることのない視線があった。

興味とか、好奇心とかそういうんじゃないやなくて。

嫉妬とか羨みとかそういうものでもなくて。

怒り、みたいな。

不愉快全開で伸びている視線。

あの人は確か。

「…西島さん」

「え？委員長？」

「そう。その西島さん」

もう一度言う。

「…あ、確かに」

彼女は、たとえ視線なんて見えなくても明らかに分かるくらい、カップルをじっと見続けた。

誘われる視線？（前書き）

何故か大橋くん目線で始まります！

誘われる視線？

あのカップルが一緒に食べ始めて日が経つにつれて、徐々に緒川の表情が堅くなってきた。

最初は一瞬、あれ？って顔をただけであまり気にしていないようだったけど。

違和感のようなものが、日に日に緒川の中で広がっていくみたいで、あいつはずっと何かを考えていた。

教室を見渡して。

カップルと誰かを見比べる。

まるで視線を辿るように。

あいつ視線が見えるのかな、なんて馬鹿みたいなことを考える。

まあそれはないにしても、視線に敏感なのは確かだ。

10日くらい経っただろうか。

いつもの給食時間中、いきなり緒川が立ち上がった。

目を見開いて、一点だけを見つめている。長谷川は驚いて、いきなり何？って問いかけたけど、緒川にはもはや声すら届いていないようだ。

ただ、呟くような声で。

「にしま…」

とだけ言って、その名前の彼女の方へ向かっていった。

「意外に行動力あるよなあ」

「緒川くん、どうしたの？」

長谷川は首を傾げている。

「さあ？俺も分かんねえや」

でも、何となくだけど。
委員長も緒川に救われるんじゃないかな、と思った。
俺と同じように。

僕は今、空き教室に西島さんという。僕がいきなり呼び出したのだ。

「先生が呼んでたんじゃなかったんですか」

西島さんが確信じみた声で話しかける。

「うん、ごめん。あれは嘘」

「告白だとしたら、ノー」

「いやいや違うから!!」

ていうか、やっぱりノーなのか!!

別にそんなつもりじゃなかったけれど、普通にショックだ。

「だとしたら何？」

勘が外れて意外なのか、驚いた顔をしている彼女。

そんなにモテるのですか？

「私がモテるのおかしいですか」

顔に出てましたか!?

それとも心が読めるの!?

「そんな!滅相もない!」

滅相もないって言葉、勢いで初めて使っちゃったよ…。

使い方大丈夫だよな…。

「まあ、モテませんがね」

「…はあ。そうですか」

読めねえ…。

突っ込んでいいのか、悪いのか。

「で、本題は？」

「あーはい」

もう、なんかやる気削がれちゃったけど、ここまできたらやるしかない。

「多分、ていうか絶対気のせいじゃないと思うんだけど、最近クラスの雰囲気変だよな」

「そう？」

「一番不自然なのが、給食時間中。例のカップルがイチャついているとき」

「そうね。確かにあのカップルのせいで、みんな落ち着かないみたいですね」

「落ち着かないのが普通なんだよ西島さん。カップルを直視できなくて、でも気になっちゃってソワソワするのが普通なんだ。だけど最近、どうもおかしい。みんな、カップルを直視しているんだよ」

「…みんな慣れたんじゃないんですか？」

「それも考えたんだけどね。だけど慣れたんだとしたら、カップルを気にせず食べるようになると思うんだ。明らかに意図的に、カップルを見続けているとしか考えられない。最初は数人だったけど、今ではクラスの3分の2くらいの人間がそうしてる。おかげで、カップルもさすがに大人しくなったよね」

「……………」

「僕が思うに、それは誰かに催促されて行われている。カップルがイチャつくことに耐えられない人間によってね。みんな別にあのカップルに恨みなんて持っていなかったと思うけど、少なからず居心地の悪い思いをしていたことは確かだ。そこを上手くつつかれたら、協力してくれるんじゃないかな。そして、結果的にカップルは自重し始めた」

「……………」

「満足かい？西島さん」

「…なんで黒幕が私だと？」

「黒幕って言うほど、悪いことはしていないと思うんだけどね」

「はぐらかさないで」

「…はい。えーと、簡単に言うと、……………なんとなく」

「は？」

目を見開く西島さん。

何こいつ、ふざけてんの？っていうのが明らかに伝わってくる。

ああ、そうか。分かりやすいのかな西島さんって。

「別に証拠なんてないんだ。ただ、一番初めにカップルを直視していたのが西島さんで、周りがそうするにしたがって唯一止めたのが西島さんってだけで」

「……………」

「違うって言われたら、僕は反論できないし、する根拠もない」

「不公平だと思ったんですよ」

「へ？」

唐突に喋りだす西島さん。

読めないなあ。

「ここは周りに幸せを見せつけるには不適切な場所だと思っただけです。付き合うにしたってマナーやモラルがあるでしょう？恋は盲目だからって理由で許容していい問題ではないと思うんです」

真面目な人なのかな？

几帳面というか。

「別に、真面目なつもりではないんですけどね」

「あれ、僕声に出しましたっけ？声に出した覚えがないんだけど」

「知ってます。けど、そんな顔しました」

どんな顔！？

「そんな顔」

「声にしてないのは会話の中に入れないで！！」

やっぱり心読まれてんじゃね！？

「ふふっ」

あれ…？今、笑った、のか？

いつも無表情なだけに、笑顔が新鮮だ。

当然だけど、やっぱり笑った顔が一番だな。

「話を戻しますが、私、みんな平等であって然るべきだと思うんです」

「へえ」

今の時代、珍しい意見だな。

「才能とか育ちの良さとか、生まれ持ってくるものが元々違うから、最初から平等じゃないっていうのは分かってます。その違いは大きいし、なんとか出来るものじゃない。だからって、小さな不平等を認めるのは間違ってます。例えば、グレーゾーンとか。それが、不平等を生み出している」

「ギリギリセーフとか、そういうの？」

「そう。あのカップルにしたって、配慮が足りてなかったと思います。せんか？多少迷惑かけてても、付き合い始めたばかりだから大目に見てと言わんばかりの態度。イライラしました」

「なるほどね」

「だから、私はあのカップルをチラチラ見ている人たちと少しずつ話をしていった。ちよつとやりすぎだよねー目のやり場に困るんだーって人にはアドバイスしてあげたんです。ただ直視してやればいい。そしたらあの二人も気付くから、って。」

「……………」

「まあ、こんなに乗ってくる人が多いとは思いませんでしたけど。でも、それだけ不快に思ってた人がいたって証拠じゃないですか。私、間違ってます？」

「間違ってるない、かな」

「そうでしょう？」

「でもそれってずれてない？」

正しいとか正しくないとか。

間違っているとか間違っていないとか。

善いとか悪いとか。

そこって本当に大切か？

「人の幸せってなんであんなに疎ましいのかな。目障りで鬱陶しくて。どうしても排除したくなる」

「…私のは、そういうんじゃない。ただ、不平等だから…」

「西島さんはそうかもしれないね。だけどみんなはただカップルが鬱陶しかっただけだよ。だからこそ、多くの人が君に賛同した」

「……………」

「視線を感じさせる、ってよく効く方法だと思うよ。でも、残酷だ。西島さん分かってる？少なくとも、付き合い始めて浮かれてる程度の奴らにするべきことじゃない」

「…何？和田さんと柳沢くんってあなたのお友達なの？だから必死に庇ってあげてるの？」

「いやーあんまり話したことはないんですけどねー。多分人生で、たくさん話した人ベスト10に西島さんランクインしちゃったよ。ははは」

「今日のこの数分の会話だけで、私がランクイン!？」

「まあ、冗談はさておき」

「本当に冗談でしょうね!!重いんですけど!!」

僕は笑ってうやむやにした。
はははは…

「西島さんが自分の信念の下に行動したことは分かっているよ。もうこれ以上あのカップルに何かするつもりはないんだろう？」

「…ええ」

「だけど、君が止めたところで他の人は止めたりしないよ。だって、その人たちはただの便乗で、信念なんてものがないんだから。そして、視線を受け続けることは酷いストレスになる。恋の熱を一気に覚ますことができるくらいにね。本来の目的はもう果たした。西島さん、今後どう責任を取るつもり？」

「……………!」

「視線がトラウマになってしまったら？二人が別れてしまったら？ここからイジメが始まったら？君は知らん振りか？」

「……………」

「…ごめん、言い過ぎた」

西島さんの顔は今にも泣いてしまいそうだった。陥れようだなんて、彼女は少しも思っていない。軽い注意のつもりで。ただの牽制のつもりで。

彼女は、純粹に平等だった。それだけだ。

視線を知らない君に。

どう伝えればいいだろう？

どうすれば伝えれるだろう？

「…西島さん」

「……………」

彼女は顔をあげる。

目はちよつと赤いけど、それでも逸らすことなく僕を直視する。

そして、僕も彼女を見る。

「もし、視線が見えたらさ。西島さんの線と僕の線、バラバラの二つが、結びあって混ざり合って、一つになるのが分かるんじゃないかな」

多分だけどね、と付け足す僕。

なんだか照れくさくなつて、下を向いて笑う。

「きつと、綺麗だよ」

知ってほしい。

本当に、満たされるんだ。

「視線って、そうあるべきじゃないかって僕は思うんだ」

西島さんの目から、透明な涙が流れる。

それは、ぽろぽろと頬を伝って。

床にこぼれ落ちる。

だけど、彼女は涙を拭うことなく、ひたすら泣いた。

鳴咽も出さず静かに涙を流す彼女とは対称的に、僕はクラスメイトの涙にテンパってあたふたした。

「うわっ！ え、ちょっとめっ！ そんなつもりじゃ！ あーどうしよう。僕はいったいどうすれば！？ えーと、あ！ ハンカチあるけど使って！ それから、えっと、どうすればいいですか！！」

「……とりあえず、ムードを崩すその口を閉じなさい」

次の日の給食時間。

「緒川くん！ 一体全体これはどういうことですか！」

「何のことでしょう…」

委員長が椅子と弁当を持って、俺らの小さな班机の空いている場所、つまりは長谷川の向かい側を陣取った。

「アレですよ！ アレ！ 全然緒川くんが言ったようになってないじゃないですか！」

カップルが大人しくなったことからかいかやすくなったのか、周りが明るい雰囲気で彼らに接している。向こうもまんざらじゃないのか、照れながらも質問攻めに一つずつ答えていた。

「トラウマとかイジメとか言うから、私は良心の呵責に悩まされて眠れなかったんですよ！？」

「まあ…あれは最悪の事態を提示しただけであって…何はともあれ良かったじゃないですか」

「よくないです！ 少しでも感動してしまった自分が恥ずかしい！ もうなんですかこれ！ グダグダじゃないですか！」

「多分アレですよ。トラウマとかイジメ路線に走ったらR15表記とかする羽目になるから、強制的に何でもなかったことにされちゃ

「ったんじゃない？」

「いったい何の話をしてるんですか！！」

何が無やら分からない俺と長谷川。
顔を見合わせる。

「なんだか委員長丸くなったね」
と、こっそり長谷川が俺に言う。

「緒川くんって人の心を開く何かがあるよねえ」

「そうだな」

何はともあれ結果オーライだ。

「ね、委員長も一緒にご飯食べようよ」
長谷川が微笑みかける。

「あの：前から突っ込もうと思っていたんですが、私、ただの配布係で委員長でもなんでもないんですけど」

「まあ細かい事は気にせずに」

「細かいですかね！？」

また、少しだけ俺の周りが賑やかになった。その光景に思わず、笑みがこぼれる。

それもこれも全部、緒川のおかげかな。

「大したやつだなホント」

グツタリしている緒川に言葉をかける。

「へ？何の話？」

緒川は間の抜けた返事をした。

誘われる視線？（後書き）

西島さんのあだ名が委員長なのは、全てが委員長っぽいからです。クラスの誰かが、「西島さんって、そこらへんの委員長より委員長らしいよねー」って言ったときから、みんなが何気に使うようになりました。

緒川は、誰に対しても名字で呼ぶクセがあるので、委員長とは言いません。

緒川のそういうところ、委員長は少し気に入ってたりします。

集まる視線？

行事とかイベントとか。

そういう時に、活躍できれば。

ヒーローになれる。

それは数日間だけかもしれない。

だけど、それは羨ましいものだし、きっと誰もが憧れる。

みんなみんな、ヒーローになりたがっている。

誰よりも目立ちたがっている。

視線を、集めたがっている。

今日はクラスマッチだ。

男子はバスケット。

女子はバレーボール。

クラスが一つになる数少ない行事である。

あまり話したこともない人でも、同じクラスのよしみで応援してくれる。点を取ったら拍手で称えてくれる。勝ったら自分のことのように喜んでくれる。

うん。

なかなか良いイベントなんじゃないかな？

心地よい視線。

見ているだけで愉快になる。

「大橋くん大活躍だね」

大橋くんはクラブに入っていないけど、もともと運動神経が良いのかシュートを入れまくっていた。さらには長身だからブロックも凄い。彼のおかげでこのクラスが勝っているといっても過言ではない。

「だね。さっきからホント凄いよ」

彼を見つめる視線の数も。

「ああ、楽しいな」

「試合を見るのが？バスケ好きなの？緒川くん」
じゃなくて。

視線を見るのが、楽しいんだ。

「えーと、うん。そうだね」

「ふーん？」

「ってアレ？長谷川さんだ」

「え！？今更！？」

長谷川さんが僕の隣にいた。

「長谷川さんのチームはどうだった？」

「負けましたー。だから応援にね」

「はは、そっか」

女子は外でバレーだったから、長谷川さんの体操服は少し茶色くなっていた。

あ、また視線が。

長谷川さんに複数の線がまわりついていた。

そっか、体操服だもんな。

僕は立ち上がって、とりあえず左側で長谷川さんをガン見している他クラスの男子たちの視線を阻もうと、タオルを取るふりをして長谷川さんの左側に座る。

僕に痛い視線が当たる。

おーおー、悔しがってる悔しがってる。

「タオルくらい言ってくれば取ったのに」

「あ、そっか。ありがとう」

よく見たら僕が手に取ったタオルは僕のものではなかったけど、今更変えられないので、このタオルの持ち主に心の中で謝しておく。

「そういえば、緒川くんはなんで隅っこで見学？大橋くんと同じチームじゃなかったっけ」

「うん。そうなんだけどね。よそ見してたらボールが顔にぶつかっちゃって安静にしてるんだ」

正確には、視線に気を取られて。

「ははは。ドジだなあ」

「全くだよ」

「あ、やっぱりちょっと顔腫れてる」

ふいに長谷川さんの顔が近づく。

勝手に心拍数が上がる。

おいおい。顔、赤くなってないよな。

「冷やした方がいいと思うよ」

「あ、いや！だ、大丈夫！大したことないから」
大したことになってるのは、僕の心臓だ。

「そっか」

ようやく顔が離れた。

落ち着け、僕。

女子の顔が近いってだけでドギマギするなんて、本当にガキだなあ。なんて、客観的に考えてみた。

「そういえばね。私、一年の時も大橋くんと同じクラスだったんだけど、そのときの大橋くんも今の緒川くんと同じことになってたよ」
「へえ。ボールがぶつかって見学？」

「そ。ボーっとしてたんだってさ。バスケならまだ分かるけど、あの時サッカーだったじゃない？滅多に顔面に当たらないよねえ」
けたけた笑う長谷川さん。

「ははは、大橋くんらしいな」
彼ならやらかしそうだ。

だけど、今は大活躍中。

最近、ボーっとしてる時間が少ない気がする。

何か気持ちの変化でもあったのだろうか。

まあ、何にしたところで、友達が活躍しているのを見るのは嬉しいものだ。

「あ、勝ったよ」

笛が体育館に鳴り響く。

「おー良い勝負してたんだ」
18対16。

僕らのクラスの勝ちだ。

「ほら、緒川くん。集合だよ。行かなきゃ」

「あ、そっか」

僕は急いでコートに入る。

「あ！緒川あ、大丈夫か」

「うん。みんなお疲れ」

「おー！勝ったぜ！」

僕のチームは和気あいあいと勝利を喜ぶ。
その中でボーっとしている大橋くん。

何見てるんだ？

はは、汗が落ちた床か。

「お疲れ、大橋くん」

「お、おー。緒川、平気か」

「うん、ありがとう。大活躍だったね」

「そう？：うん、まあ去年よりは活躍したな」

「ボールを顔面キャッチして見学したんだって？」

「お前もだろ！」

「はははは」

この後も、僕らのチームは健闘し2位になった。

僕はさすがにもう顔面にボールをぶつけることはなく、1ゴールだけ決めることができた。

ま、簡単にいうと。

大した活躍はしていません。

教室に帰ったら、クラスは活気づいていた。

大橋くんなんか、特にもみくちゃにされていて、いつもと違う光景だけになんだか面白かった。

積極的に大橋くんに声をかける人もいれば、遠くから彼をちらちら見て盛り上がってる女の子たちもいた。

視線はヒーローである彼に。

彼にだけに向けられる。

集まって、集まって。

それは、ヒーローを包み込んで。

さらに、彼を輝かせる。

僕はこんな視線を体験したことはないけど、きっと温かいものなんじゃないかと思う。

多分、心地よくて。

自分が認められたような安心感。

大橋くんは感じられただろうか。

少しだけ羨ましくもある。

だけど僕には似合わないな、なんて思ったり。諦めというよりは、たぶん確信に近いのかな。

よく分からないけど、僕はこのままでいいや。

遠くからヒーローを見つめるポジションも僕は嫌いじゃない。

何となく視線を逸らすと、教室の隅にいた真中くんと目があつた。

真中くんも僕や大橋くんと同じチームだった。彼も補欠で僕と交代
ごうたいで試合にでていた。

その真中くんが、僕に手で来い来いと合図する。

僕は席を立って、彼の方に向かった。

集まる視線？

真中くんは教室の後ろで、掲示板に貼られているプリントの画鋏を取っては突き刺しを繰り返している。
そして僕が近づくと、いきなり僕の肩に手を回して言った。

「俺達は同類だ」

……………は？

言葉の意味を図りかね、真中くんを見る。

彼は何故か自信満々な顔をしていた。

それとは対称的に怪訝な顔をしている僕を気にも止めず、真中くんは言葉が続ける。

「だからさ」

「うん」

「大橋に嫌がらせしようぜ」

「……………ん！？」

分からない…。

いったい彼の思考回路はどうなっているのか…。

「えーと、なんで？」

とりあえず尋ねてみる。

「ええええ！！？？」

何故か、めっちゃくちゃ驚く真中くん。

その驚き方は、こんな当然で常識的なことに何でそんなトンチンカ
ンな質問をぶつけるんだコイツは、と言わんばかりである。

あれ？

僕がおかしいんのか？

「何でってお前、そんなん決まってるじゃん」

「はあ」

「大橋が羨ましいからだよ」

「…羨ましいから嫌がらせをする？」

「なんか変じゃないか？」

「羨ましいって思ったとき、なんかイライラしねえ？ チヤホヤされてる奴に対しても、そいつに嫉妬する自分に対しても」

「ああ、なるほど」

「そっか、そういうことか。」

「それなら分からないこともないな。」

「え！？ まさか、お前嫌がらせしないの！？」

「…しないよ」

「マジで！？ 何で何で何で！？ 逆に何で！？」

「何でって言われても…」

「嫌がらせしないんだったらお前どうすんの！？」

「どう…って。何もしないよ」

「はあ！？」

「羨ましいときは、ただ何となく羨ましいなあって思うだけ」

「そう言ったら。」

「真中くんは悲しそうな顔をした。」

「本当に、心から悲しそうな顔をした。」

「なんでだろう。」

「お前、間違ってるよ。何にもしないのは絶対良くない」
「え？」

「誰かに羨ましいって感情を持ったとき、人は何かしらの行動を起こしてその気持ちを消化しなきゃならないんだ」

「…消化」

「そう。その対象に憎まれ口たたいたり、そこらへんの女子のよう

に周りでキャーキャー言って盛り上がった。そうしたら、感情は一気に盛り上がるけどすぐに落ち着く」

「……」

「だけど、それができない奴がたまにいる。それが俺でありお前だよ。そういう奴は陰から嫌がらせをするべきなんだ」

「なんで、僕もそういう人間だと分かるの？」

「そんなん見れば分かる。遠くからヒーロー見てるだけの奴は大概そうさ」

妙に説得力のある話だった。

僕が大橋くんに対して羨ましさを感じたのは確かだ。自分の気持ちを消化するために嫌がらせをする、か。

「うーん。だけど、俺と緒川ちよつと違うな。だってお前見たとき、俺びっくりしたもん」

「何で？」

「お前、軽く微笑んでたからさ。大橋が友達であっても、羨ましい感情だってあるはずなのに、笑ってて」

真中くんは真顔で。

真剣に、真面目に。

本音を言う。

「正直気持ちが悪かった」

「…はは、そっか」

「だーかーらー！笑うなって！そこ笑うとこじゃねーし！」

「はは、うん。そう、なんだけどね、はははっ」

なんだか愉快だった。

そっかあ。

この世の中にはいろんな人がいるんだなあ。

いろんな考えがあつて。

いろんな思いがあつて。

どれが正解とか関係ない。

嫌がらせは悪いこと。

そんなことは真中くんになんて当然分かつてる。

だけど、それは。

消化するために必要なことだと。

自分を保つために大切なことだと。

彼は主張する。

僕から見たら、真中くんは意味不明な人物で。

真中くんから見たら、僕は理解不能な人物で。

彼のこの話を聞いて納得したところで、僕は羨ましいという感情をスルーして微笑むことを止めないだろうし、僕が嫌がらせをするなと言ったところで、彼は嫌がらせを止めることはないだろう。

だけど、どこかしら繋がっていたりもする。

「なるほどなるほど。嫌がらせかあ。悪くないね。いや、悪いことだけど悪くない」

「お！ようやく分かつてくれたか！」

「うん。だけど根本的な問題を考えてみた。何故、羨ましいと思つてしまうのか。さあ何故だと思う？」

「そりゃあ、アレだろ。注目されてるからだろ」

「そうだよな。何故注目された人間を羨ましく思つてしまうのか。

答えは、僕らが誰にも注目されていないからだ！」

そう、それが僕らの共通点。

誰にも注目されないという虚しさ。

「…ああ、うん。そうだな…。うん、そうなんだけど…、言つて悲しくならねえ…？」

「しかーし！」

「何だよそのテンション」

「真中くん、君は試合中一つの儂い視線に気付かなかったのかい？」

「……………なんだとっ？」

「実は真中くんを見つめていた女の子がいたんだよ」

「いやいやいや！嘘だろ！信じねーぞ！だって俺補欠だしー！背え低いしー！」

明らかにテンション上がってきた真中くんだった。

「ホントだって。僕、顔面にボール当たって安静にしていたときあったじゃん？その時、全体を見てたんだよ。多分、増山さん。あの、三つ編みの。真中くんを見つめてたの確かに見たよ」

「オイオイオイオイ。マジか！えー増山って！えーマジで！？俺を！？アレか？真中あー頑張ってるえーみたいなの？普段大きい声出さないけど、つい出しちゃったみたいなの！？」

「えー！？あ…うん。そんな感じかな多分」

見てたのは確かだけど…。

応援してたかどうかは分かんないし、そもそも真中くんだけを見ていたかは計り知れないし、僕がちょうど視線を見たときに増山さんは偶然真中くんを見ただけかも知れど…。

……………。

増山さん…ごめん…。

彼の嫌がらせを阻止するためとはいえ、ヤバいことをしてしまったかもしれない。

真中くんはずっと早口で何かをっていうかおそろく妄想を喋り続けている。

「あー確かにちょうど俺が華麗にパスしたとき、びびっと何か感じたわ。アレはあーゆーアレか。あーなるほどなるほど。おーけー分

かった。というわけで緒川！」

「はい!？」

増山さんに対して懺悔をしてたら、いきなり名前を呼ばれてびっくりする。

「俺、一人の女だけのヒーローになるわ」

あー…うん。

増山さん本当にすみません。

「そもそもね、あんな一瞬だけのヒーローになったところで、どーなるんだって感じ。やっぱ一人だけでいいからずっとそいつのためにヒーローで居続ける、それが男の在り方なんじゃねえの？」

「…はあ」

「ま、今回は増山のために嫌がらせすんの止めとくわ」

「そっか」

結果オーライ…なのか…？

悶々と悩んでいると、何を勘違いしたのか真中くんが僕の肩に手を置いて励ましてきた。

「なんていうかさ、緒川を見ていた女子だってきつというと思うぜ」

「そうかな」

「絶対そう」

「うん、ありがとう」

そう言いつつ、それは無いなとなんとなく思った。

心の底からそう思ったし、別にそれでもいいと本気で思った。

視線が繋がる瞬間が見えるだけで…僕は、本当に…。

「もやもやしたら、何かしろよ。それだけは、ちゃんとしろ」

マジ顔でそう言ったあと、真中くんは微笑んで、席に戻っていった。

：スキップしてたな、真中くん。

僕も席につく。

隣には、ぐったりと机に伏せている大橋くん。

僕は、大橋くんの右肩をポンポンとたたく。

「ん…」

大橋くんは身体を起こし、右側を向く。

ぷに。

僕の人差し指が、彼のほっぺに刺さった。
なぜなら、人差し指を立てて彼の肩に手を置いたからだ。

一時停止。

そして、大橋くんが疑問を口にする。

「…え。何」

「嫌がらせ」

「嫌がらせ？」

「ちょっと羨ましかったから」

そう言うと、大橋くんは笑った。

僕も笑った。

「そっか。スッキリした？」

「うーん、どうかな」

よく分からなかった。

だけど、悪くない気分だ。

集まる視線？（後書き）

新キャラ真中くん。

人とは少し違う視点から物事を見てます。しかし本人はその自覚はない。

常に直球で正直、そしてまっすぐな良い奴ではあるけれど、ただ凄くアホです。

道が逸れても全力疾走。
憎めないアホです。

気付かれない視線（前書き）

番外編みたいなアレです。

長谷川さん目線のストーリー！。

気付かない視線

視線は存在するんだ。

そう、言ってくれた人がいる。

その人は。

誰よりも視線に敏感で。

視線に苦しんでいる私の唯一の理解者だ。

だけど、気付いているのかな？

多分きつと、気付いていないんだろうなあ。

私は学校に行く時間が人より少しだけ早い。

花壇に水をやらなきゃいけないっていうこともあるけど、なんていうか、人の少ない静まり返った教室が好きだからかな。

7時45分。

水やりを終えて教室に入ろうとした時間だ。

朝礼が8時30分だから、多分まだ人はいないだろう。

そう思って、教室のドアを開ける。

しかし、予想に反してもうすでに一人いた。

大橋くんだ。

おはよう、と声をかけようとして思い留まる。

彼は私が教室に入ったことに気がつく様子もなく、ぼーっとしていた。

いや、違うな。

何だろう。

教室の雰囲気を感じ取っているみたいな。

何かを探しているような。
ただひたすら、空気を見つめている。

大橋くんって、たまにどこ見ているのか分かんないときあるなあ。

そんなことを思いながら、彼の邪魔にならないよう教室の端っこを通って席につく。

ん？なんか違和感。

隣には相変わらずの大橋くんが座っている。

あれ？隣って…。

「ここって緒川くんの席じゃない？」

確か右から、私、緒川くん、大橋くんの順番だったような。

「ん。あ、長谷川おはよ」

「うん、おはよう。緒川くんの席で何してるの？」

「何してるって……。うーん、何してるんだろなあ」

「あは、なにそれ」

大橋くんらしいっちゃあらしいけど。

「なんていうかさ、俺が言うのもなんだけど、緒川って変な奴じゃん？」

「確かに」

それには激しく同意。

「緒川の席に座って、緒川の目線で見たら、なんか分かるかなって……。あれ？なんだこれ。何してんだ俺」

ああ、そっか。

さっきのは、そういうことだったんだ。

「ごめん、何言ってるのか分かんないよな…」

「ううん、分かるよ」

驚いた顔で私の方を向く大橋くん。
こんな顔もするんだね。

「緒川くんのこと、もっと知りたかったんでしょう？」

大橋くんもきつと、緒川くんに救われたんだろう。

私とおんなじように。

大橋くんの変化は、端から見てもよく分かる。

彼が緒川くんと仲良くなったときからだ。

私も、緒川くんと関わってから少し変わった。

男子とは必要最低限しか話さない人間だったけど、だいぶ話せるようになったんだ。少なくとも、今みたいに自分から話しかけることは昔だったら有り得ない。

自分を理解してくれる存在は。

とても、特別で。

だからこそ、知りたくなる。

その人をもっと、理解したくなる。

そして、あわよくば。

その人にとっての特別が自分であるように。

「多分、私も。大橋くんと一緒」

この一言で、伝わる気がした。

大橋くんはただ、そっか、と微笑んだ。

「ふあ、なんか眠いや」

「まだ時間あるし、少し寝たら？」

「ん。そうする」

大橋くんは、緒川くんの席を離れて自分の席に着く。
机に伏せて一分もたたないうちに寝息が聞こえてきた。

徐々に教室に入ってくるクラスメイト。

おはよう、という声が飛び交い、だんだん騒がしくなってくる。
いつもの光景。

そして、いつもの視線。

大丈夫。

いい加減もう慣れた。

平気平気。

気のせい気のせい。

こういうときは、無心に外の景色を眺めればいい。
他人がどこを見ているかなんて、私には関係ない。
気にするな気にするな気にするな気にするな気にするな——

「長谷川さん、おはよう」

目の前に緒川くんがいた。

「あ、と。おはよ」

かろうじて、そう答える。

緒川くんは、ふと何かに気づいたかのように後ろを振り返る。

そして。

悲しそうな。

困惑したような。

そんな、切ない表情を一瞬する。
私を見たとき。

いや、私にまわりついていいる何かを見たとき。
いつも、そんな顔をするんだ。

彼が何故そんな顔をするのか分からないけど。

私のためにそんな顔してくれるような気がして。

不謹慎だけど、少し嬉しくて。

不幸であることに優越感を感じてる自分がいる。

同情されているだけなのに。

もしかしたら、特別なんじゃないかなんて思って。

自分の浅ましさに腹が立つ。

緒川くんは、数歩左にずれて私に話しかけた。

「今日は暑いねえ」

「…うん。もう夏だもん」

「僕、実は結構暑いのが好きなんだよ。なんか溶けてしまいそうで」

「あはは、なにそれ」

緒川くん。

私、知ってるんだよ。

いつも君が、私を突き刺す視線を遮ってくれてること。

「…なんか、ありがとう」

「え！？…えーと…何のこと？」

「…なんでもないっすよー」

「えー？」

緒川くんは、少し上を向いて考える仕草をしたけど思い当たる節が
みたあたらないようで、まあいっか、と呟いた。

いい加減気づきなよ。

全く。

鈍いんだか敏感なんだか。

私だけ振り回されてんじゃない。

でも、いつか届くといい。

私や大橋くんのこの気持ち。

緒川くんに、届くといい。

そして、あわよくば。

君も同じ気持ちであってくれたなら――。

気付かれない視線（後書き）

緒川くんはなんやかんやで好かれていますね。

こう、違う人目線で書いたら、物語の雰囲気がちよい違うから楽しいっす。

意識させる視線？

視線を感じる、ということがよくある。

目線を合わせていなくても。

視界の端に入っているだけでも。

完全に背中を向けていても。

見られている、という感覚。

その視線の正体は。

恋だったり。

気まぐれだったり。

はたまた、黒い感情だったりするわけだけど。

視線の正体は、見られている側には分からない。

ただ、意識する。

見られていることを、意識する。

それは、突然に。

夏休み前だから、完全に気が抜けていて。

注意力散漫で。

ついでに、ツイてなかった。

いつものメンバーでいつものように廊下を歩いていたときのこと。

どん。

「あ、すみません」

僕は人にぶつかった。

反射的に謝り、顔を見る。

どこかで見た顔だった。

さらに言う。

もう、見たくない顔だった。

「…く…九頭…せんぱ…い」

九頭先輩は一つ上の三年生で、園芸部である。

先輩が長谷川さんの胸を凝視していたことに対して何故か僕が逆上し怒鳴ってしまうという謎の事件以来、できるだけ目を合わせないようにしてきたというのに…。

「お、お前あんときの…」

九頭先輩も僕を覚えていたみたいで、はっとした顔になる。

「あのときって何？」

先輩と一緒に歩いていた軽そうな男の人が訊ねた。

「あー、えーと…」

先輩は口ごもっている。

当然といえば当然だ。

この話題をなんとかして終わらせなければ…！

「あーっと！あの時はホント！助かりました！先輩は恩人っす！あのっぜひお礼がしたいんですがっ！あ！ソーセイジぱんDX、2つ先のコンビニで買ってきますね！じゃ！また！」

とりあえず、事実を捏造してみる。

「いや、あんな変なパンこの学校の購買にしかねえよ。つか、いらねえし」

心底嫌そうな顔をしている九頭先輩。

ソーセージぱんDXでつれるのは緒川だけだよ、と大橋くんがつぶやく。

そうだったのか…！

驚愕の事実が発覚してしまった。

よし、作戦変更だ。

「お礼がいらなんなんて…！先輩はなんて心が広いんだ！じゃ、なんか困ったこととかあったら言ってください！僕、力少ないながらも協力するんで！じゃ！また！」

「あ、九頭。じゃあ、この後輩君にアレ協力してもらえばいいじゃん」

先輩の連れがまた余計なことを口走る。

何そのグッドアイデア！みたいなキラキラした顔は…。

社交辞令に決まってんじゃない！

立ち去らせろや！

ここは静かに立ち去らせてくれや！

状況が理解できている長谷川さんは必死に笑いをこらえてプルプルしている。

大橋くんは状況を理解していないはずだが、今のこの状況自体が面白いかニヤニヤしている。

九頭先輩は眉間にシワを寄せたが、連れの勢いに押されて、そうだな、と呟いた。

「ま、立ち話もなんだし、裏庭いこーぜー」

今現在、昼休憩であることを恨まずにはいらなかった。

くっ…何か口実を…！

半歩後ろに下がっている、長谷川さんと大橋くんに目で助けを求めたが、二人はニヤけてるだけで、僕を助ける気はさらさら無いようだった。

「じゃあ、緒川くん。気をつけてね」

「頑張れよ」

しかも、逃げるつもりだった。

「…させるか」

僕は二人の手首を掴み、先輩の連れ（軽）にこの二人も同行させていいか聞いてみる。

「いや、いいけども。先輩の連れ（軽）って何。（軽）って必要だった？」

心を読まれた…だと…！

だけど最近、読まれるのはご愛嬌というか。なんか顔に書いてあるらしいので、もう突っ込まないことにする。

「あの…すみませんが、お名前は…？」

「俺？唐沢だけど」

「軽沢先輩ですか。了解です」

「え、何を了解した？『かるさわ』じゃなくて『からさわ』だけど。え、聞いている？」

「聞いてますよ。行きましょう」

「こう、地味に攻撃されている気がするの、気のせいかな」

気のせいじゃないっすよ、軽沢先輩。

完全に荒んでいる僕だった。

「ごちゃごちゃ言ってねーで早く行くぞ」

九頭先輩がすたすた歩き始める。

それに従い、裏庭に集まった僕たちは、さっそく本題に入った。

「最近、九頭が怪しい視線を感じるって言うんだ」

そう、軽沢先輩が説明する。

「そのせいで、九頭も大人しくなっちゃまって俺としてはつまらない限りだよ。昔は見境なく巨乳見てたのに……」

スパーンっと九頭先輩が彼をはたいた。

清々しい音だった。

「そこ、今必要なかっただろ!？」

「だってえ」

「るせー。お前もうしゃべんな」

九頭先輩がお口チャックのジェスチャーをする。

しぶしぶ従う軽沢先輩。

「まあ、俺は誰にも相談する気は無かったんだけど」

「俺には相談してくれたじゃん」

「軽沢! 強制的にお口チャックしてやろうか!？」

「唐沢ですう……」

再び黙る軽沢先輩。

面白いなこの2人。

「まあ、よく考えたらさ。お前、なんていうか……視線に敏感だったじゃん。視線探し、ちょっと協力してくんない? つーか、するっていったよな。拒否権ないからな」

「……やるに決まってるじゃないですかー」

厄介なことになった。

「心当たりとかないんですか?」

長谷川さんが質問する。

「んー。それが本当に分からないんだよ。視線感じて後ろ振り向い

ても誰が見てたのか全然分らない。気持ち悪いんだ。俺の勘違いなのか、それとも誰かが執拗に俺をガン見してるのか。本当に毎日毎日。もうマジ意味分かんね……」

不意に言葉を止め、はっとしたように長谷川さんを見る九頭先輩。

「…こーゆーこと…ね」

そう、呟く。

そういうことですよ、九頭先輩。

「長谷川さん」

「へ!？」

九頭先輩が長谷川さんの両手を持つ。

「な、なな、な何ですか…?」

「ごめんな!俺ホント何とも思ってたなくて。なんか癖みたいな感じになってて。もうしない!約束する!」

そう言って、頭を下げた。

「い、いいですから!大丈夫ですから!頭上げて…」

長谷川さんが、オロオロしながらフォローしているとき、何も知らない軽沢先輩が僕に訊ねてきた。

「九頭の奴、何やってんの?」

「…さあ、僕にもさっぱり」

汗を拭くふりをして自分の顔を隠す。

隠していないと滲み出してしまう。

快感、というのだろうか。

僕は、気分が高揚していた。

意識させる視線？（後書き）

中途半端な感じになってしまった！。
続きますのでしばしお待ちを！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6139p/>

視線

2011年6月12日11時17分発行